

# 生涯忘れ得ぬ定年退職旅行

## 第一班が関東・関西へ

四分会(四山) 南場 勇

本年度の定年退職旅行に参加された南場勇さんに、感激の旅記を寄せていただきました。



日光陽明門前での記念撮影

参加者十七人は十一月二十六日二十時十七分発、特急「明皇」で大牟田を出発。旅立ちの一夜は車中である。

二十七日は京都観光。さすが戦禍を免れた古都だけに神社仏閣が多く、古い立派な美術工芸・庭園などを見ることができた。西陣織の織元では、ながい伝統を受け継いだ根柢のいる仕事に見入り、華麗に飾りつけられる「きものショー」では、衣裳と京美人の立ち居振舞いに魅了され、よい目の保養をした。

少々時間に追われたが、京都の街をはなれ大阪へ。

大阪コロナホテルにつき、午後六時から関西不知火会の人たちとバイキング料理で会食をしながら



関東不知火会の仲間との交流会場で心のこもった歓迎が身にしみたのでした。

とお互いに気持ちが通じ合うのであろう。労働者の連帯のきずなをより強くすることを誓い合い、会館前で記念撮影。

交通渋滞の中を、原宿の竹の子族の変な踊りを横目にしながらNKKへ。見学コースを一巡する。夕暮れ時の東京の街を見ながら浅草の魚販に聞き、夕食後浅草仲見世を散策する。

二十九日は東武特急で日光へ。華嚴の滝では勇大な滝に感動する。

雪が降々に残っていて寒い。日光観光のバスは、ゆっくりして貸切りのようだった。神橋・参道を通って東照宮へ。有名な三猿や陽明門など細かい彫刻や壁面を見ながら、徳川時代の芸術の力に感心するとともに、將軍という権力で、いかに莫大な金力と労力が費やされたことかと思ひながら下山する。

本堂に行つてよかったと思う。生涯忘れられない人生の一頁をかざる、定年退職旅行だった。

## 囚人労働遺跡を訪ねる

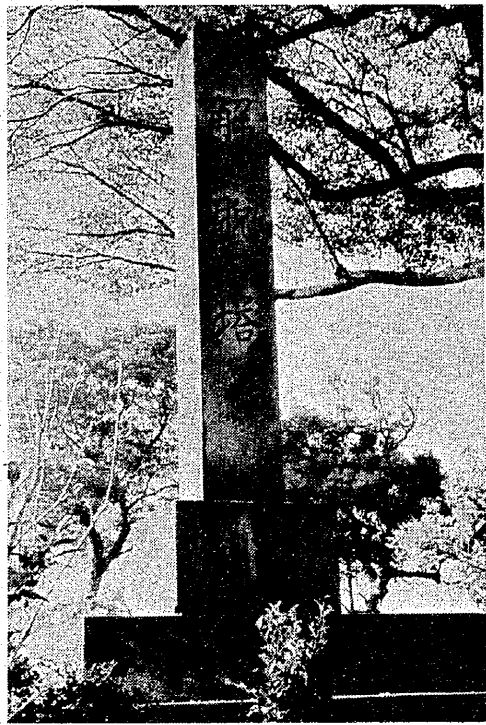
⑦

## 解脱塔

小崎 文人

大牟田市勝立町一丁目。ここに大砂社宅と呼ばれる炭坑社宅が立ち並んでいます。といっても今では、石炭産業の衰退を象徴するかのようにつたといふとばかりでなく、三池集治監の死囚人を葬った墓だといふことが明らかです。

その社宅の裏手に続く小高い丘の頂に、解脱塔という一つの石碑が立っています。高くても大いにも「解脱塔」の太字が表に刻ま



新勝立町の大砂社宅上の解脱塔です。もともと、この丘の南側斜面一帯が三池集治監の埋葬地だったので、この塔の前に立つとどこからともなく鬼気立ちのほってくる思いがしてくるのです。

るうちに死んだ囚人たちの骨を納めたところなのです。

大砂社宅のうち、解脱塔にいちばん近い辺りに立ち並んでいる分は、昭和十年ごろ建てられたと思われるが、そのためすっかり雑木で覆われていた山肌を切り開き、整地にかかったところ、そこかしこから、がらがらと白骨が出てきました。それは幾山も積み上げられましたが、おどろいて調べますと、そこが三池集治監の埋葬地だったと、出てくる白骨は、死んでここに運ばれ、埋められた死囚人の骸骨に違いないことがわかったのです。

解脱塔のもとにある古井戸らしきものは、実はうろたえて、その

九月に入ると、有明海周辺では夜釣り者が数多く釣れたと、その気配を察したのか、君が、手のひらで俺の口をしつかりと押さえた。冷静になれというが、だいたい無理な話である。何となく正直に、本音が取り得る俺のジュニアは、俺の意志に反して勝手にには切れんばかりに怒っている。横を見ると、Tちゃんの眼もきらきらだ。しかし、月に照らされつづめる女の肌は、男と対照的に青白く、その一対はあやしいまでに美しく、幻想の世界を見ているような気分になっていた。

突然、チリン、チリン、と鈴が鳴った。

「畜生ッ、もう少しなのに、魚の奴隷魔しやがってえーとぼやきながら大合戦したためタイミングがはずれ、まともに砂地に、どすーんと尻もちをついてしまった。

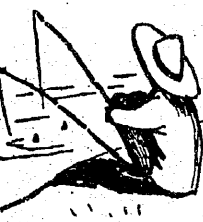
「痛たたっ……」

おかげで一升ビンの酒は砂に飲ませてしまい、アベックはびっくり倒れて「目散に逃げ出し、散々の態である。

「帰ろっか」

ボソリといったTちゃんに合せて納竿。

釣果は小グチ五匹。なんだか口重たく、二人とも無言で手を上げ左右に別れた。



## 釣りキチ大平丸

連載第十七回

## さんさんの巻

十一分会(三川) 石田 鈍竿